

伊藤外科ニュース



86号

2011.7発行



梅雨の花々

梅雨の今は、湿気が多く空気が身体に纏わりつくようで憂鬱な気分の時期です。しかし、花々は綺麗で私のよく行くゴルフ場では、6月初旬は藤の花が素晴らしく、今はアジサイが様々な色彩の花を咲かせています。藤は、棚いっばいに花を咲かせながら幹はいつも朽ちているように見えます。花を咲かし、巨大なえんどう豆のような実を成らす栄養はどのように運ばれるのかいつも不思議に思っています。

ところで、伊藤外科の玄関の植え込みにも可憐な黄色い花があり、名前がわからず気になっていました。ある朝、患者さんに伺ったところ俗に美女柳と呼ばれる花だと教えていただきました。なかなか色艶のある名前の木花で、朝、診療所の玄関を開ける楽しみがまた一つできました。

メタボの話

さて、今回はメタボ（メタボリックシンドローム）の話少々。

スリムな青年の隣で中年男性が懸命にお腹を凹ませている笑えないテレビのCMがあります。一般に、メタボはお腹の出ている事とかわれていますが、その本質は全身の動脈硬化を起こしやすい体の状態を意味し、体型だけの問題ではありません。

内臓脂肪が多いと糖尿病になり易いので、本来はCT検査などで評価する内臓脂肪の多さをお腹周りの測定で検討し、血圧の高さ、コレステロールの多さよりメタボの程度の判定をします。さらに、喫煙の習慣は動脈硬化をさらに悪化させます。動脈硬化症は、通常は症状がありません。頭は脳卒中、心臓は狭心症、心筋梗塞、足は閉塞性動脈硬化症として発症するわけですから、事は重大です。

国はメタボを予防するために様々な事業を展開しているようですが、いずれにしても自分自身での生活習慣の見直しが大事です。（もともと、私自身も酒量とウエストの増加は止まりませんが）

ちなみに、お国の公衆衛生審議会は、

- 1) 適正な睡眠時間
- 2) 喫煙しない
- 3) 適正な体重の維持
- 4) 過度の飲酒をしない
- 5) 定期的な運動
- 6) 朝食を毎日食べる
- 7) 間食をしない

をメタボ予防のために勧めています。当たり前のような内容ですがなかなか守られていない項目もあります。特に私が気になることは、多くの働き盛りの人の夕食が遅く、結果として朝食を摂らない生活習慣です。私の同級生で糖尿病の予防に従事している医師は、「朝抜き、昼立ち食いざるそば、そして夜遅くドカ食い」では健康を維持できませんと講演しています。

功績とノルマに追われる働き盛りの方々、厳しい環境でしようが健康に留意して蒸し暑いこの時期を乗り越えてください。

(院長)



HP→ <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp/>



今回の一冊

山椒太夫・高瀬舟

著者 森 鷗外

うちのご亭主はここ数年、曹洞宗のお寺の坐禅会に足繁く通っている。持ち帰る寺の老師の話がなかなか興味深く、ワタクシもここ半年ほど便乗するようになった。

そんなご亭主がこのところ気に入っているのが、「寒山」と「拾得」。ともに唐の時代に中国にいたとされる伝説的な禅僧だが、乞食同然の風貌と風変わりな行動で「風狂の僧」として知られ、よく禅画の題材になっている。「森鷗外が短編で『寒山拾得』を書いているから、読んでみる？」と言われて、文庫本を手渡された。この話はたいへん禅問答的で、示唆に富んだ一編だったが、気になったのはその文庫、短編集『山椒太夫・高瀬舟』（岩波文庫）。どこかで見たことがあると思ったら、三弓の本棚でした。

そんなこんなで、たぶん、高校生以来、三十年ぶりに森鷗外を読んだ。三弓はこの短編集のなかの「高瀬舟」について、自分で書いた本のなかで触れている。

舞台となる高瀬川は、京都・鴨川とほぼ平行して流れる運河である。江戸時代、京都の罪人が遠島を言い渡されると、高瀬川を曳舟に乗せられて大阪に送られた。この物語は、罪人・喜助と、それを護送する町奉行附の同心の対話で展開していく。兄弟ふたりの極貧の暮らしのなか、病で寝ついて仕事もできない弟は剃刀を使って自死を計る。死にきれずに苦しんでいるところを兄の喜助を見つけ、弟の断末魔にあらがえずに留めを刺してしまう。これが喜助の罪名「弟殺し」である。

ここでは話を語る喜助やそれを聞く同心の心の機微はとても書ききれないので、そこらへんは読んでいただくとして、物語の最後に同心の心の揺らぎが語られる。「これが果たして弟殺し、人殺しというものだろうか、という疑いを解くことが出来なかった」。

鷗外は文豪であると同時に、医者であるのは周知の通り。三弓は大正5年に発表された『高瀬川』について、「森鷗外は結論を出していないが、日本文学史上初めて安楽死を取り上げている」と書いている。本文のなかには安楽死という言葉は出てこない。その代わりに本人が書いた物語の縁起には、同じ意味の「ユウタナジイ」というフランス語で記されている。大正初期の時代、まだ日本語としてはなかったのだろう。

本書は古い時代を舞台にした小説の短編が6編掲載されているが、おもしろいことに時折、外国語が出てくる。「マルチリウム(殉教・献身)」「オオトリテエ(権威)」など。洋行帰りの鷗外らしいといってしまうまえにそれまでだが、少なからず、それらと同義の「日本語」が明治・大正期にはまだなかったとも考えられる。言葉がないということは、概念そのものが社会にないということ……、だよな。鷗外を読んでいたなら「明治生まれの日本語」が気になり始め、さっそく本屋で『翻訳語成立事情』なる新書を購入。なにやら頭がとっちらかったままに展開する梅雨時である。

(一弓)